

〈LD等発達障害教育〉

みんなが「わかる・できる」を目指した国語授業の工夫

——特別支援教育の視点を取り入れて——

八重瀬町立東風平小学校教諭 赤 嶺 美 佳

I テーマ設定の理由

平成19年4月に学校教育法が一部改正され、特別支援教育が法的に位置づけられて4年が経過した。特別支援教育は、これまでの特殊学級の対象児童だけでなく通常の学級に在籍する発達障害の児童を含めて、特別な支援を要する児童が在籍するすべての学校において実施されるものである。

文部科学省は、平成17年度から展開した「特別支援教育推進体制事業」に引き続き、平成19年度からは特別支援教育コーディネーターの指名や特別支援教育に関する校内委員会の設置、巡回相談の実施など、特別支援教育体制整備のための事業を実施している。このことにより、特別支援教育に対する教師の意識が高まってきた。

文部科学省が平成14年に実施した調査では、通常の学級に在籍する特別な支援を要する児童生徒が6.3%存在するという調査結果が出ている。また、県教育委員会は、通常の学級に在籍する特別な支援を要する児童生徒が3.4%存在することを平成20年4月県内小中学校の実態調査で明らかにし、「3.4%というのはクラスに1人から2人は支援が必要な児童生徒がいることになる。そのため、一部の教員ではなくすべての教員で対応する必要がある」としている。しかし、一斉授業の中では、支援が必要な児童を個別に指導することが難しく、時間を確保する工夫が必要になってくる。そこで、発達障害児の特性を理解した上でこれまでの授業を見直し、特別な支援を要する児童を含めたすべての児童を対象とした授業づくりが求められてくる。

国語科学習において、国語授業は曖昧でわかりにくいものが多い印象を受ける。例えば、登場人物の気持ちを読み取らせる心情理解であったり文章の裏に隠れている意味を読み取ったりと、心で味わう授業になりがちであり、このような抽象的な思考は、特別な支援を要する児童にとって混乱を招く要因となる。

そこで、特別支援教育の視点を取り入れた「授業のユニバーサルデザイン」を試みることで、国語科学習の授業改善につながると考えた。ユニバーサルデザインとは、ロナルド・メイス（1985）が提唱した概念であり、「できるだけ多くの人が利用可能であるようなデザインにする」という考え方である。そのユニバーサルデザインの考え方を国語授業に取り入れ、通常の学級において特別支援教育を進めることは、障害のある児童だけでなく、学級の児童全員の学力向上につながるものだと考えられる。

以上のことから、「特別な支援を要する児童への配慮」といった特別支援教育の視点を通常の学級授業に取り入れることでユニバーサルデザインの授業へとつながり、全員の児童が楽しく「わかる・できる」ようになると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

国語授業において、特別支援教育の視点を取り入れることによってユニバーサルデザインの授業へとつながり、みんなが楽しく「わかる・できる」と感じる授業が成立するであろう。

II 研究内容

1 特別支援教育における基本的視点

平成15年の文部科学省が設置した「今後の特別支援教育の在り方について」という最終報告では、「これまでの特殊教育は、障害の種類と程度に応じて盲・聾・養護学校や特殊学級において教育を行う等により、手厚くきめ細かい教育を行うことを基本的な考えとしていた。また、通常の学級に多く在籍すると考えられるLD、ADHD、高機能自閉症により学習や生活についての特別な支援を要する児童生徒に対する教育的対応については、従来の特殊教育は必ずしも十分に対応できていない状況にある」とし、「これらの障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な対応を図ることが特別支援教育における基本的視点として重要である」としている。

2 ユニバーサルデザインの授業

特別支援教育では、一人一人の子どもに対応するためにアセスメントを十分に行い、課題をスモー

ルステップで解決できるように組み、具体物や視覚情報を多く用いて指導している。さらに、より「わかる・できる」ために、環境や時間、内容の構造化を取り入れている。

また、通常の学級において、平成14年（県は平成20年）に実施した実態調査から特別支援教育の重要性が認識され、現場では授業改善の必要性が出てきた。通常の学級で教師に求められている授業は、「一斉指導、教材分析、集団形成、評価、発問・板書の方法や技術」など、集団を指導する中で、個々の子どもに対応する力量や技が重要になってくる。そこで、より「わかる・できる」授業にしてい くために、特別支援教育の視点を取り入れ、具体的な手だてをとっていくことが求められるようになった。その授業づくりに、「ユニバーサルデザインの授業」がある。

3 我が国における近年の動向

近年、ユニバーサルデザインという考え方に基づいて、障害者や高齢者を含めた全ての人が利用し やすい、あるいは使いやすさを追求した商品や建物が多く見られるようになってきている。

(1) 廣瀬由美子による教科教育と特別支援教育の融合

「授業におけるカウンセリング マインド」を提案している廣瀬は、このユニバーサルデザインの考え 方を取り入れつつ、授業研究を通 して教科教育と特別支援教育の融 合を試みている。図1は、廣瀬が 講義等で利用しているスライドの 一部である。「このように、発達 障害や特別な支援が必要な子ども からスタートした教育的配慮や支 援は、他の子どもにとってもわか りやすい内容になっていること、 言い換えれば支援のユニバーサ ルデザインであるといえる」とし、 教科教育と特別支援教育が融合す

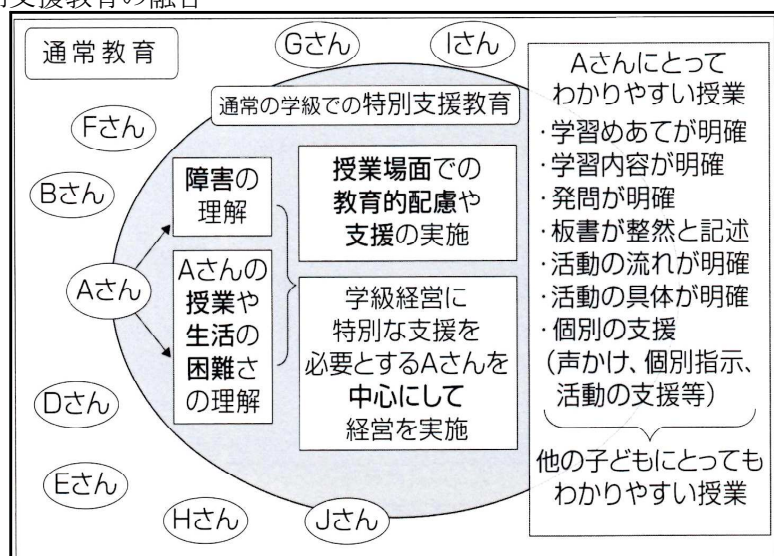


図1 廣瀬由美子による「支援のユニバーサルデザイン」

ることで、全ての子どもが分かるユニバーサルデザインとしての授業づくりを目指している。そして、授業において教師が個別的な支援や配慮を考える際、重要な視点は、授業におけるカウンセリングマインド（受容と共感の姿勢）が必要であると述べている。

(2) 桂聖による国語授業のユニバーサルデザイン

廣瀬の考えを国語の授業に取り入れ、国語授業のユニバーサルデザインを進めている筑波大学附 属小学校の桂聖は、「学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、全員の子どもが、楽しく『わか る・できる』ように工夫・配慮された通常学級における国語授業のデザイン」と提言している。

文言にある「工夫」と「配慮」には、次の二つの研究的アプローチがあるとしている。

一つは、「国語授業づくりの『工夫』」であり、主に国語教育からアプローチすることになる。桂 は、国語教育の立場から、「論理」を授業の目標に捉えながら、「三つの要件」による授業のデザイ ンを提案している。「三つの要件」とは、「授業を焦点化『シンプルに』する」「授業を視覚化『ビ ジュアルに』する」「授業で共有化『シェア』する」である。

もう一つは、「個別の『配慮』」であり、特別支援教育からのアプローチである。さらに、桂は、 「特別支援教育の考え方を国語授業に活かすからといって、特別なことをするのではない」とし、 「通常学級の国語授業を本当に全員がわかる授業にするために、特別支援教育の考え方を活かして 授業づくりを見直すことがねらいである」としている。

Ⅲ 研究の実際

1 2つの観点による授業の工夫

本研究のテーマとのつながりとして、通常の学級に特別支援教育の視点を取り入れ、授業改善の工 夫を考えていきたい。授業づくりの工夫には、教材研究を深めることが重要になってくる。それぞ れの教師が教材研究をした日々の授業実践に、「工夫」と「配慮」を取り入れることを考え、「二つの観

点」をもとに授業の工夫を行った。「二つの観点」とは、「構造化」「視覚化」である。

(1) 「構造化『システム化』」とは、授業を構造化することにより、見通しを持たせることである

- ① 授業の流れ（教材の流れ、1時間の流れ）を示す
- ② 基礎・基本の定着の工夫（音読の仕方・語彙を増やす工夫）
- ③ 場の設定の工夫（発表・作業・ヒントカードを置く場）
- ④ 時間の確保（考える時間、練習の時間、個別に指導する時間）

(2) 「視覚化『ビジュアル化』」とは、授業を視覚化することにより、理解しやすくすることである

- ① 掲示の仕方や掲示物の工夫
- ② 図や写真の効果的な提示の仕方
- ③ 流れがわかる板書の工夫

授業をつくる上で、2つの観点による授業の工夫をし、目標を達成させるために必要な学習内容を精選（セレクト）する工夫を行った。

例えば、授業前にホワイトボードを教室内に移動させる工夫をした。そのことで、次の教科へ気持ちを切り替えさせることができ、不必要な視覚を遮断することで集中できる環境になる。そして、単元の流れを示し、見通しを持たせることができる。このように、システム化することを「構造化」とした。これらを目に見える形で示し、理解しやすくすることが「視覚化」である。その上で、目標達成に必要なものは何かを吟味し、授業内容を「精選」した。そして、桂が前提としている「授業の質の高さ」を考慮し、授業づくりの工夫に個別の配慮を取り入れた。

2 対象学級・対象児童の実態把握

(1) 学級の実態

対象学級の児童は、1学期から様々な形態での音読を経験し、ほとんどの児童が楽しんで音読をしている。文章をすらすら読める児童が多いが、まとまりごとに読むことが苦手な児童が数人いる。11月上旬に「国語に関する事前アンケート」（図10、11に検証授業後のアンケートと併せて提示）を実施した結果から、国語や読書はほとんどの児童が好きだと答えている。児童が最も苦手を感じていることは、「発表」である。これは本校の課題でもあるが、今回のアンケートで1年生から発表に抵抗があることが分かった。また、「文字を書くこと」が好きな児童は多くいるが「文章を書くこと」が苦手な児童が数人いる。

(2) 特別な支援を要する児童の実態

表1 特別な支援を要する児童の実態（児童A、児童Bと表記）

	実 態	結 果	所見（・状況等、○良さ、●苦手）
児童A	発達障害 (H22年10月19日 実施結果)	S-M社会生活能力検査 S A : 4歳11月 S Q : 84 ・意志交換は高いが、移動と作業、集団参加が低くなっている。	・特別教育支援員が配置されている。 ・幼稚園の頃は、ほとんど教室に入れなかった。 ・小学校に入った頃は教室に入れないことが多かったが、6月頃からは教室にいたことが多くなった。授業準備を徹底したところ、始業時刻を守れるようになり学習に意欲的に取り組むようになってきている。
	Q-U : 図9参照 (H23年11月10日 実施結果)	非承認群 ・不適応やいじめ被害を受けている可能性は低い が、学級内で認められることが少なく、自主的に活動することが少ない。 意欲が低い。	●授業の終わり頃に離席が見られる。 ○困っている人がいるとすぐに手伝いに行き、「大丈夫？」と声をかける。 ○語彙が豊富で、自分の思いを言葉で伝えることができる。 ●自主的に活動することが少なく、特別教育支援員に頼る場面が見られる。
児童B	Q-U : 図9参照 (H23年11月10日 実施結果)	学級生活不満足群 ・いじめや悪ふざけを受けていたり、不適応になっている可能性が高い。学級の中で自分の居場所を見い出せず、不登校になる可能性が高い。	・入学当初から、登校が遅くなりがちである。朝、家でぐずることが多く、母親からたびたび相談を受ける。 ほめることを共通理解し連携により遅刻が減ってきた。 ○明るく穏やかな性格で友達から好かれている。 ○課題を最後まで仕上げようとする。 ●自己肯定感が低い。 ●授業中、ぼんやりしていることが多い。

3 指導の実際

(1) 教材の工夫

表2 教材全体を通しての授業づくりの工夫

授業づくりの工夫（システム化○、ビジュアル化◎）

- 前面のホワイトボードに単元の流れを示し、見通しを持たせる。
 - ア 単元のめあてや学習計画表（図2を拡大）を掲示し、今、単元のどの部分を学習しているかを示す。導入で確認したり、授業の終わりに、学級の「がんばり」を児童の挙手で評価し頑張ったところをほめる。
 - イ ファイルに学習計画表（図2）を綴らせ、毎時間自己評価させる。次に何をすることがわかり、次時への期待にもつながる。
- 魅力ある目標（ゴール）を設定する。
 - ア 「乗り物図鑑を作ろう」（図3）
 - イ 「言葉遊び発表会」をしよう
 図鑑を作ることや発表会をすることを伝え、期待感を持たせる。
- ◎ 教室掲示の工夫（図4）
 - ア 前面の黒板横の視覚情報を、ホワイトボードやカーテンなどで遮断する。
 - イ 側面には、授業で使う教科書の拡大文や群読の詩などを掲示する。
 - ウ 背面には、初発の感想からの児童一人一人の課題を掲示する。
 - エ 廊下には、学習に必要な図書やカードを置く。

4	3	2	1	ことばあそびをしよう
ことばあそびはつばようかい	つくろう	「なぞなぞ」をつくろう	「ことばあそびうた」をつくろう	
つくろう	「上から下からことば」を			
7	6	5	4	3
2	1			

図2 学習計画表



図3 目標（ゴール）



図4 教室掲示の工夫

- ◎ 図や写真の利用
 - ア 学習内容をわかりやすくするための教材・教具の工夫（図5、写真1）
 - イ 拡大写真を活用し、イメージの手助けをする。
 - ウ 板書の中で、今学習しているところを矢印で示す。（写真2）

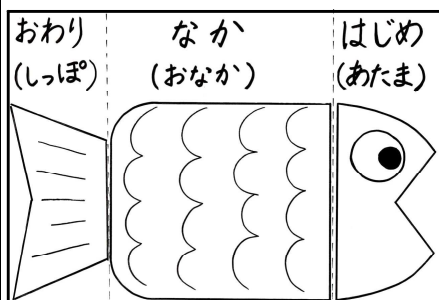


図5 文章構成図

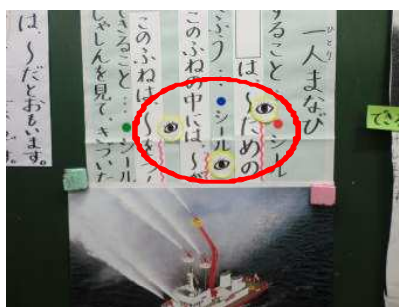


写真1 注目マーク（目）

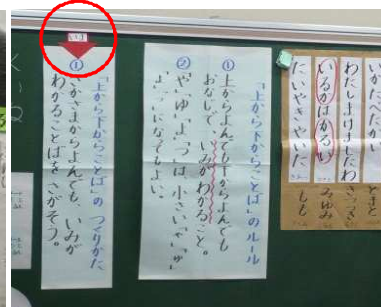


写真2 「いま」を示す

- 学習に必要な基礎・基本を定着させるための工夫
 - ア 音読カードを活用し、家庭と連携する。

イ 教科書や書き込みノートに10個の○を書かせ、音読を10回するたびにシールをあげて賞賛する。

ウ 語彙を増やすためのカード

毎日、「動物」「花」「食べ物」等のテーマを与え、家庭で言葉集めをさせる。次の朝、カードを提出させ、担任がチェックし、宝物(シール)を集めさせる。

(2) 1時間の授業

表3 1時間単位の授業の工夫

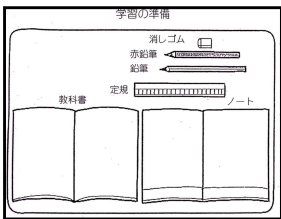
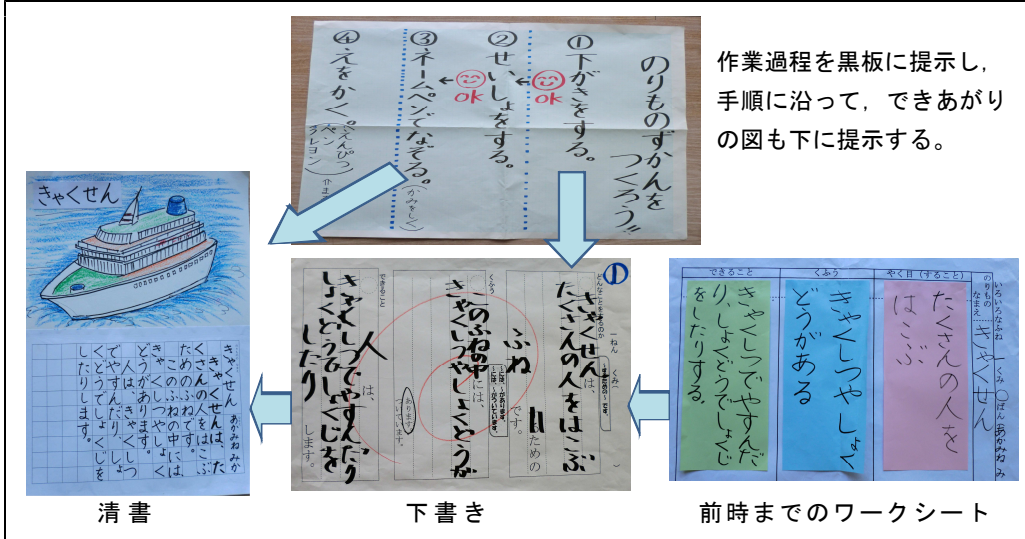
	学級全体に対する授業の工夫	個別の配慮（児童をA、Bと表記）
授業前	○ 学習準備の徹底 休み時間は必ず授業の準備をさせ、授業にスムーズに入れるようにする。(図6)  図6：机上モデル ○ 気持ちを学習に切り替えるための手だてとして、ホワイトボードを移動しカーテンを掛ける。そのことで次の授業を意識させる。	A 授業の前に準備ができているか、特別教育支援員と確認させる。授業にスムーズに入るために重要なことなので、徹底させる。(図6) - 机の上の準備 - トイレ - 水飲み A 特別教育支援員と、行動チェックシートをもとに授業の確認をする。 A 授業に不必要な視覚情報を、ホワイトボードやカーテンなどで遮断する。近くにある棚や視聴覚機器なども隠す。
導入	○ 始業のあいさつの後、活動を一定にする。 - 漢字の空書きからペア読み - 群読・声出し ○ 空書きカードは、朝、活動の流れの中でも活用している。(写真3)  写真3 朝のなぞり書き ◎ めあてを板書する際に、児童が視写しやすいようにノートと同じ構成の黒板を使う。	A 授業始めの活動を一定の流れにし、見通しを持たせることにより安心感を与える。 - 漢字の空書き - 群読・声出し A・B 授業始めの活動の中で、子どもの表情や様子を確認する。 B ノートを書き写すことが困難な児童に手本カードを渡す。
展開	○ 作業の順序を示す(図7) 作業の手順や1人学びの仕方等を黒板に提示する。  清書 下書き 前時までのワークシート	A・B 作業の順序を黒板に提示し、見通しがもてるようにする。(図7)

図7 作業の手順

- 発表方法を工夫する
 - ア 全体に発表する前に、ペア(隣同士)で話し合いを設定し、自信を持って発表させる。
 - イ グループ内での発表を取り入れる。
- 場の設定を工夫する
 - ア 作業の進み具合によって、オープンスペースに低いテーブルを置き、描画や作業の場を設定する。集中させるために、作文と図鑑作成の場を分けた。
 - イ 黒板の前で発表し合うことで、討論が活発になる。
- ◎ 学習の流れが分かる板書の工夫をし、いつでも学習の確認や振り返りができるようにする。(写真5)



写真5 板書

- 時間を確保する
 - 書く時間を確保し、自分の考えを持って学習させることができる。

- まとめ
- ◎ 板書の工夫
 - ノートと同じ構成の用紙(拡大コピー)を使う。
 - ◎ 学習の流れを示した掲示物で、次時の授業を確認する。

- A 落ち着きのない時に、「秘密のイエローカード」で合図を送る。(写真4)
 - 授業前に、児童と合図の確認をする。



写真4 イエローカード

- A 授業の途中に変化の場面を意図的に設定する。その際、目的意識を持たせることで集中を持続させることができる。

- ・立ったり座ったり
- ・ヒントカードのあるコーナーに移動
- ・シールを貼る

- B 発表の場を黒板の前にすることで、発表しやすい雰囲気にする。

- A 集団が苦手なので、声かけをする。

- A 黒板に提示している手順のどこを学習しているかを、「いま」カード(写真6)で示す。

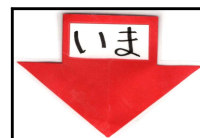
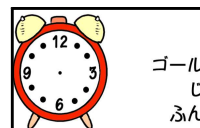


写真6 カード

- A 作業の始まりと終わりの時刻を示し、静かに作業することもあわせて絵で提示する。

(図8)



- A・B

- 書く時間の確保により、机間巡視による個別指導をすることができる。

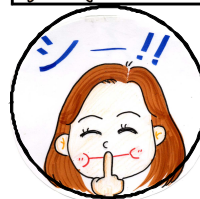


図8 時間と顔

- B ノートを書き写すことが困難な児童に手本カードを渡す。

- A 次時の授業を確認することで、学習の見通しを持たせることができる。

(3) 特別教育支援員との連携

- ① 行動チェックシート(図9)を活用する。

- ア 特別教育支援員に児童の行動をチェックしてもらい、授業改善に役立てる。

- イ 児童の行動をチェックし、行動パターンを知る。

- ② 共通理解する時間の確保

- ア 授業の流れを確認

- イ 共通理解による一貫した指導

- ③ 支援カードの作成

- 児童の実態を参考にして、支援カードを作成し活用する。

月 日 校時 教科名 () 記載者 ()		※気になる行動があったとき、番号に丸をつけ、メモをする。(○気持 ●気なげ)	
		A	B(他の児童も)
導入	学習準備	1 集中	1 集中
	空書き	2 離席	2 離席
	ペア読み	3 落ち着かない	3 落ち着かない
	振り返り	4 ぼーっとする	4 ぼーっとする
	めあて	5 気にする	5 気にする
		6 その他 ()	6 その他 ()
音読		1 集中	1 集中
		2 離席	2 離席
		3 落ち着かない	3 落ち着かない
		4 ぼーっとする	4 ぼーっとする
		5 気にする	5 気にする
		6 その他 ()	6 その他 ()
調べる 展		1 集中	1 集中
		2 離席	2 離席

図9 行動チェックシート

ア 授業で座り方の確認をした後、座り方のカードを机の上に貼る。授業中、カードを見て正しい座り方を確認する。

イ 着席できたら着席カードに○をつけて、がんばった日は帰る前にシールを貼る。

ウ 秘密のイエローカードを使って、児童Aに対して合図（視覚的配慮）により注意を促す。

(4) 検証授業 1, 2

- ① 単元名 のりもののことをしらべよう
教材名 いろいろなふね（説明文）

② 指導計画（全14時間扱い）

第1次 学習の見通しを持つ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間

第2次 4種類のふねそれぞれの特徴を読み取る・・・・・・・・ 5時間（第1回検証授業7／14）

第3次 好きな乗り物について調べ、カードに書く・・・・・・・・ 6時間（第2回検証授業11／14）

第4次 学習を振り返る・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1時間

③ 本時の展開

表4 学習指導案の項目の工夫

	学習活動	学級全体への支援・留意点	個別支援・留意点	支援の意図 ☆：学級，★：個別
授業前	・学習用具を準備する。	○学習準備を徹底させる。	・特別教育支援員と授業準備を確認させる。	★授業に入りやすくする。（A）
導入	1. 空書きをする。 ペア読みをする。	○始業時刻を守る。 ○読み手：相手に聞かせるように読む。 ○聞き手：なぞりながら聞く。	・授業の始めに毎回行う。 ・机間巡視をし、頭をなでて賞賛する。	★安心して授業に臨める。（A）

学習指導案で、「学級全体への支援」と「個別支援」の項目を表4のように分けて記載した。支援の意図も、学級☆と個別★を星のマークで表示した。特別な支援を要する児童に関しては、(A)、(B)と表記し、どの児童に対する支援であるかが分かるように工夫した。

④ 授業仮説

ア 発表が苦手な児童への手だてとして、「隣と話し合い」をして「発表」させることで、抵抗を取り除くことができるであろう。

イ 文字を書くことが苦手な児童Bに対して手だてを工夫することで、スムーズに文字を書くことができるであろう。

⑤ 授業仮説の検証

ア 本単元の授業後にアンケートを行い、図10のような結果となった。授業前の結果もあわせて表示し比較検討すると、「発表が好き」と「隣と話し合い」に増加がみられた。これは、全体の発表の前に、隣と話し合いをさせた発表方法の工夫によるものだと考えられる。互いに答え合わせをすることで間違いに気がつき修正したり、正答を重ねればより自信をもって答えられる。また、児童全員を前に移動させて発表させるという場の設定により、「発表しやすくなった」という児童の感想もあった。

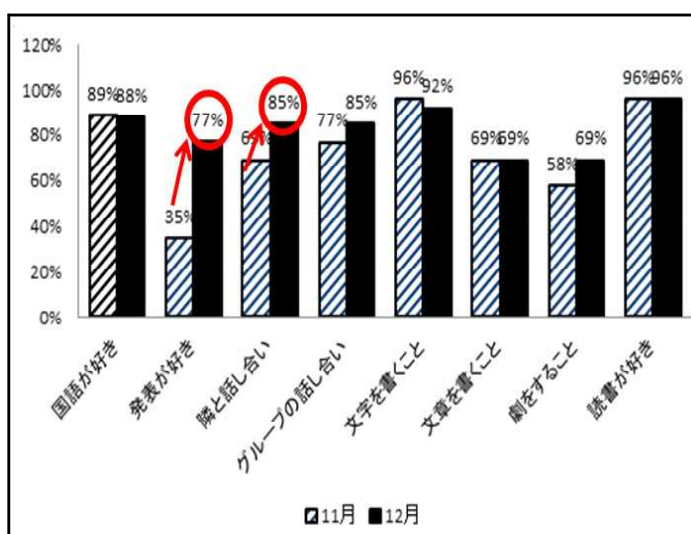


図10 国語に関するアンケート（11・12月）

イ 板書の時にノートと同じ構成の黒板や拡大コピーを使い、児童Bに対して手本を与える手だてを行った。児童Bは、これまで板書を視写するのに時間がかかっていたが、横に手本を置く

ことで、みんなと同じペースで書くことができるようになり、「文字を書くこと」が、嫌いから好きに変わった。

第1回の検証授業において特別教育支援員と連携する必要性を感じ、第2回から行動チェックシートの活用を研究に加えた。

(5) 検証授業3

① 教材名 ことばあそびをしよう

② 指導計画（全7時間扱い）

第1次 学習の見通しを持つ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1時間

第2次 言葉遊びを読んでおもしろさを活かして自分で作る・・ 5時間（第3回検証授業6／7）

第3次 作った言葉遊びを発表して感想を伝え合う・・・・・・・・ 1時間

③ 本時の目標

回文を自分で作ることができる。

④ 授業仮説

ア 発表に対する抵抗が強い児童A、Bに対する手だてとして、グループ内で発表させ、できたという達成感を味わわせることにより、自己肯定感を高めることができるであろう。

イ 行動チェックシートや支援カードを活用することで特別教育支援員との連携を図ることができ、授業の工夫に活かすことができるであろう。

⑤ 授業仮説の検証

ア 全体の場での発表に抵抗があるため、グループ内での発表を取り入れた。児童の感想に「みんなの前での発表ではなくて、ほっとした。グループの発表は楽しかった。」とあり、表情も明るく離席もみられなかった。また、グループ内での作品発表の際に、児童同士で良いところを認め合う時間を設定した。その作品を側面に掲示し賞賛した。このように、児童同士がほめ合う場面を増やすことで、学級満足度（図11）に変化が見られた。児童Aは友達関係、学習意欲、学級の雰囲気すべてのすべてに対して最高得点を示している。児童Bは学習意欲と学級の雰囲気の得点が増加している。

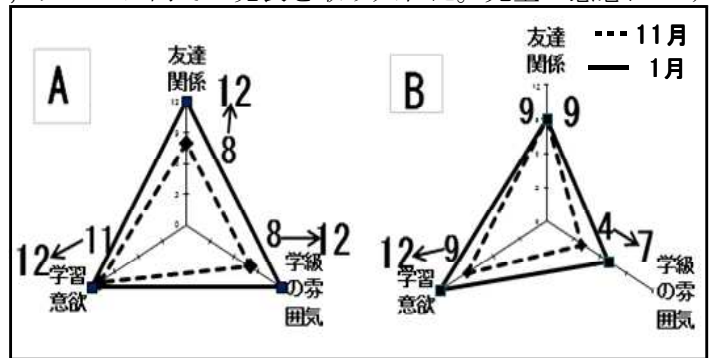


図11 学級満足度

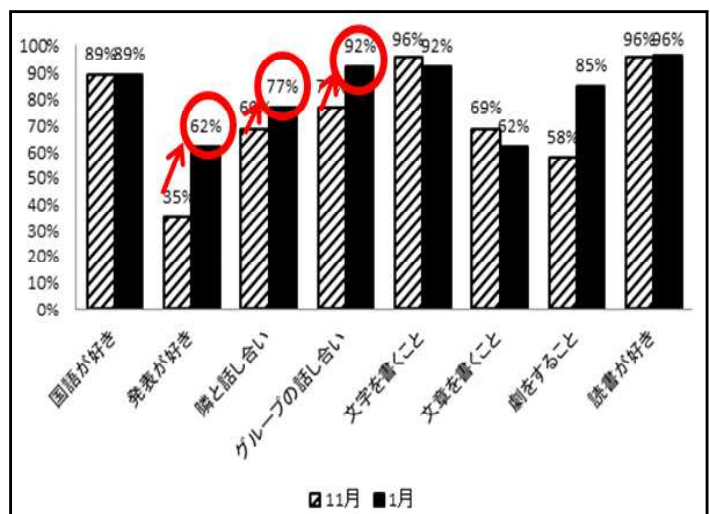


図12 国語に関するアンケート（11・1月）

では、第1回検証授業から個別の配慮をし、児童A、Bにおいては「好き」に変化している。学級では減少がみられるので、学級全体に対する手だてを工夫する必要があったと考えられる。「劇をすること」の増加においては、児童に「～になってみよう」といった簡単にできそうな表現遊びを、意識して授業に取り入れたからだと考えられる。また、授業始めに漢字の空書きやペア読みで声を出させ賞賛することにより、学びやすい雰囲気作りにつながったの

ではないかと思われる。

授業中、特別教育支援員に児童の様子を記録してもらった。そのシートから、児童Aの「離席」と「落ち着かない」を集計し、図13のようなグラフにまとめた。実線は45分の授業で離席した回数、点線は落ち着かなかった回数を示している。グラフにある1週目はシートの活用を始めた第2回検証授業の時であり、2・3週目は第3回検証授業の前半と後半である。※で示した4回には、トイレに行った回数も含まれている。

このグラフから、離席が減ってきていることが分かる。1週目はトイレに行くといつて廊下でうろうろしたりすることがあったが、2週目からは、トイレに行った後すぐに着席するようになってきている。3週目には離席が1回に減り、45分間の授業で集中が持続できた日が4日あった。

「落ち着かない」は、いすを前後に揺らす行動や鉛筆をくわえるなど、聞く場面でよく見られるが、2週目はその回数が減っている。3週目は変化がないが、特別教育支援員の感想の中に「気持ちの切り替えが早くなっている」ということから、徐々に行動に変化が見られると思われる。特別教育支援員とチェックシートをもとに、空き時間や放課後に児童理解について話し合う時間を確保した。このことにより、児童Aについて共通理解することができ、一貫した指導を行う手だてとなった。また、行動をチェックすることにより、パニックになるときの行動パターンを知ることができ、授業改善につながった。特別教育支援員の感想から、「シートにチェックすることで連絡帳や記録に記入しやすくなるので、検証後も引き続き活用している」とのことであった。

支援カードに関しては、特別教育支援員と相談して作成した。正しい座り方をカードにすることで、児童が確認しながら学習に取り組む様子が見られた。また、秘密のイエローカードや顔カードを指し示すことにより言葉での注意が減った。

4 研究仮説の検証

(1) 学級全体

1月に行ったQ-U検査の結果から、学級の児童をシートの座標上にプロットし、11月の結果と変動の大きい児童について矢印で示した（図14）。実線は望ましい方向に変化した児童、点線は望ましくない方向に変化した児童を表している。その結果、児童A、Bを含んだ6人の児童が望ましい方向に変化し、1人の児童が望ましくない方向に変化している。また、学級生活満足群に属する人数が7人（27%）から14人（54%）と2倍に増加している。図15の学校生活意欲プロフィールにおいては、学習意欲と学級の雰囲気が増加がみられる。これは、学習を通して自分を発揮することに意欲的になり、学級で活動することを肯定的に捉えるようになった児童が増加していることを示している。学級生活不満足群の人数に差がみられなかったことと、望ましくない方向に変化した児童に関しては、1年生の発達段階として友達とのコミュニケーション能力の未熟さが考えられる。不満足群には、友達にはっきりと注意でき正義感強い児童が多い。しかし、「注意したのに文句を言われた」と訴えることから、注意の仕方に課題があると思われる。また、教師の効果的な介入ができなかった反省が挙げられる。図15で友達関係において変化がほとんど見られないことから、学級生活不満足群の児童を中心に個別に対応すると同時に、子ども同士の好ましい人間関係を形成

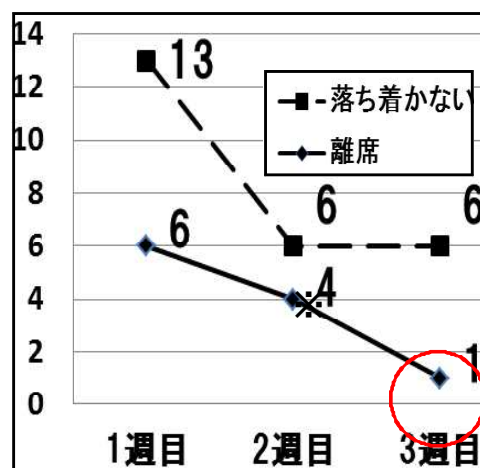


図13 「落ち着かない」「離席」の回数（回）

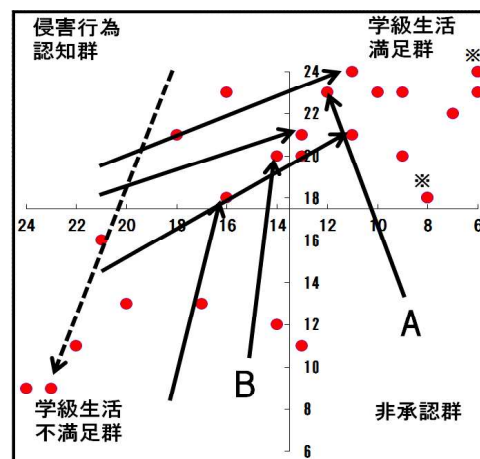


図14 学級満足度尺度結果（1月）

（※は児童が同一の座標に重なっていることを表す）

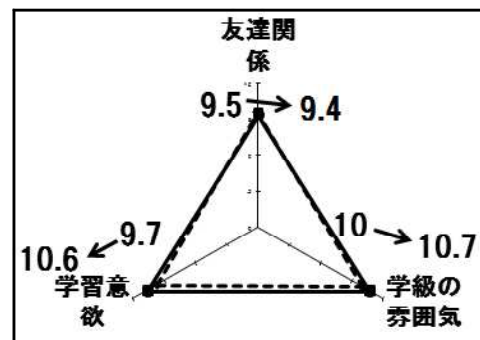


図15 学校生活意欲プロフィール

する手だてを行うという、今後の課題が見えてきた。

(2) 特別な支援を要する児童

国語に関するアンケートを個別にみると、児童Aにおいて、授業前は「おもしろくない」との理由から国語が「嫌い」としていたが、授業後、「頭に入るから」という理由から国語が「好き」となっている。また、アンケートの項目全てにおいて「嫌い」から「発表」以外全て「好き」になっている。これらのことから、「特別な支援を要する児童への配慮」として行った手だてが有効に働いたと考えられる。児童Bにおいては、授業前は「読むのが好き」という理由から国語が「好き」としていたが授業後、国語が「好き」な理由が「乗り物図鑑をつくったから」と、授業の活動を具体的に挙げている。また、アンケート項目の「隣との話し合い」と「文章を書くこと」が「嫌い」から「好き」になったことから、図鑑を完成させたことで、達成感が得られ自信につながったと思われる。図16は、児童AとBの学級満足尺度結果より11月と1月の変動を矢印で示した。A、Bともに承認得点が増加していることから、2人の児童が、級友や教師から自分の存在や行動が承認されていると感じるようになり、自己肯定感が高まったといえるであろう。

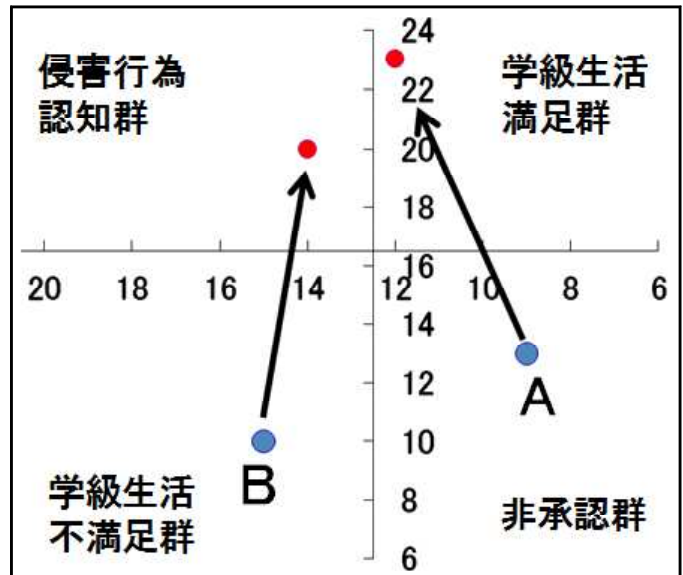


図16 学級満足度尺度結果（A、B）

以上の結果から、特別な支援を要する児童に対する手だてが学級全体に有効に働き、みんなが「わかる・できる」と感じる授業が成立したといえるであろう。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを2つの観点で体系化し、授業実践に活用できる形に整えることで、みんなが楽しく「わかる・できる」授業が成立した。
- (2) 行動チェックシートが児童の実態把握に効果的であり、その活用で特別教育支援員と連携を図ることができた。
- (3) 個別の配慮により、児童のできたという自信と学級への満足感が増し、心地よい居場所づくりにつながった。

2 課題

- (1) 全体の目標に到達できない児童に対して個別の目標を設定し、その評価の仕方を工夫する。
- (2) 発達障害の特性に応じた児童理解を広める。
- (3) わかりやすい授業を追求し、児童に寄り添った教材研究をする。

以上、通常の学級において、教師が特別支援教育の視点を持つことで子ども一人一人にとってよりよい教育を実現させることにつながると感じた。今後、職員と連携を取りながら本校におけるユニバーサルデザインの推進を図り、職員間のアイデアを出し合い共有して各自の授業力を高めていけるよう邁進していきたい。

〈主な参考文献〉

- 桂聖 2011 『国語授業のユニバーサルデザイン』 東洋館出版
井上賞子・杉本陽子 2010 『特別支援教育はじめてのいっぽ』 学研教育みらい
廣瀬由美子・桂聖・坪田耕三 2009 『通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザイン』 東洋館出版